

松井天山

千葉県市街島瞰図

解  
説

聚海書林



目次

序	房総芸術文化協会会長 小高 薫郎	110
序	千葉県文化財保護協会会長 和穎 通夫	3
松井天山・鳥瞰図を読む	森田 保	3
千葉県街鳥瞰図	齋藤正一郎	12
船橋町	綿貫 啓一	19
鳥瞰図にみる東金町	柴田 武雄	26
四街道駅	久保木 良	33
東葛飾郡市川町昭和三年	鈴木 恒男	39
本納町	高石 哲巳	47
勝浦町	佐藤 魚水	52
佐倉町	北詰 栄男	59
津田沼町	奥平 純一	66
中山町及び葛飾村	綿貫 啓一	73
八街町	久保木 良	78
柏町	山本鉦太郎	84
木更津町	高崎 繁雄	89
幕張町	森田 保	97
茂原町	高石 哲巳	103
検見川町	森田 保	110
佐原町	久保木 良	116
大多喜町	今川 範秋	122
松戸町	山本鉦太郎	127
一宮町	川戸 彰	133
大原町	鶴岡 節雄	139
八日市場町	桜井 茂隆	145
多古町	久保木 良	151
八幡町	谷島 一馬	157
成田町	小倉 博	163
千葉県浦安町鳥瞰	森田 保	171
笹川町	森田 保	177

松井天山・鳥瞰図を読む

森田 保

はじめに

昭和五十七年秋、千葉県立美術館において「絵地図の魅力」と題した特別展が開催された。この展覧会は、いわゆる絵地図の表現の絵画性と装飾性を美術の面から、一方地図としての実用性からの鳥瞰図的表現を、印刷術から近代とのかかわりをアプローチしたものであった。

総州は幕末の測地家、伊能忠敬の出身地である。また、近代日本画の巨峰の横山大観は、祖父に地図師酒井喜照を持ち、父酒井拾彦は伊能忠敬から測量術を学び、後に測量技術者を養成する時習義塾を設立した。拾彦の長男秀麿(大観)は、拾彦の実測図を銅版印刷した日本画家、結城正明に日本画の手ほどきを受けており、大観の画業は、幼少からのこの絵図の雰囲気から生まれたといっても過言ではない。

この意味で、千葉県立美術館の展覧において「伊能忠敬と横山大観コーナー」が特設され、伊能忠敬記念館から重文「琵琶湖図」などの四幅が出品された。山種美術館からは大観の『月出皎兮』と共に酒井拾彦の『改正銅鑄下総図全図』、結城正明による千葉県蔵版の大図『千葉県管内実測全図』が展示されたのである。また、特別展の副題にあるもう一本の柱、バーズ・アイの視点から歎形意齋の『日本一覽図』をはじめ、アルカンシエール美術財団蔵の円山応挙『淀川兩岸図巻』、司馬江漢、亜欧堂田善の作品が一堂に会し、さらに成田仏教図書館蔵、千葉県内の松井天山描く都市鳥瞰図二十五図が一挙に展示されたことは古地図研究グループの注目を集めた。

以来、松井天山の鳥瞰図は、大正、昭和前期全盛を極めた吉田初三郎式鳥瞰図の垂流というよりも、さらに都市鳥瞰図としての精密さと商工業的要素によって地域史に多く利用されている。

その二、三は個人、あるいは市当局によって復刻されているが、松井哲太郎の著作権継承者と接触ができた上での刊行であったとは聞いていない。肝心の松井一家の情報は昭和五十七年、佐藤達一郎氏が『古地図研究・一五三号』に寄せた記事以上にあまり進歩がないのである。この上は、本書によって天山関係の情報入手を期待すると共に、本県関係の各都市鳥瞰図から、その土地に詳しい関係者によって地域の特徴を読みとってもらうことにした。

又、絵図と鳥瞰図について若干の理解のため、先学の論考を参考にして、蛇足として加えたのが以下の小文である。引用参考文献は各文末に一括して記し感謝の意を表したい。

※(一) 特別展「絵地図の魅力」図録 千葉県立美術館 昭和五十七年九月

※(二) 広重になりたかった男・日本一鳥瞰図師吉田初三郎伝(師橋辰男) 地図情報 通巻一九号 昭和六十一年六月

松井天山の出自と鳥瞰図刊行

松井天山は謎の人である。本名を哲太郎といい、天山と号した。大正十三年(一九四二)刊行した『盤越西線温泉案内』に著作兼発行印刷人として仙台市東三番町百番地両々堂、松井哲太郎の記載がある。昭和十五年(一九四〇)『金龍山浅草寺境内図』の写生の記年が七十二翁とあるから逆算して出生年は明治二年(一八六九)となる。しかしながら大正十一年(一九二二)栃木県日光御幸町、堀井新聞店



より刊行されたという「日光中禅寺真景図」以前の事業は全く知られず、今回復刻した鳥瞰図のほとんどを所蔵する成田仏教図書館分によって、刊記などにより発刊の事情などを推測するのみである。

大正十一年から十四年まで居住した仙台市東三番丁は、もともと仙台城の城下町町割に際し、芭蕉の辻を中心に仙台城大手門から直線道路上の町割、大町とこれに直角に交差する南部街道、江戸街道と並行してできた町並みである。東三番丁の北側は、明治以来医者と代言人が多かったといわれている。東二番丁の中央警察署の場所に藩医学館があったこと、また今の市立病院敷地に仙台裁判所が設けられていたことによるのだろう。

明治十三年のこの辺の地図を見ても、界わいには宮城日報、陸羽新聞があり、東北地方の言論の中心街を形成していたようだ。ここに両々堂という印刷所が存在し営業活動をした事実は、今後明治期の当地方の新聞等、印刷物を子細に調べれば確認できよう。

号天山の確証は、昭和六年（一九三二）印刷の『大日本国立公園候補地鬼怒溪谷温泉郷鳥瞰図』に松井哲太郎号天山の記載があるとされる。また前記、天山の鳥瞰図所蔵の佐藤達一郎氏は大正末年、東京牛込で血縁と覚しき松井篤太郎が陽々堂という印刷所を営んでいる関係から、仕事の多い東京周辺に居を移したのではと推測されているが、昭和二年（一九二九）から昭和五年（一九三〇）まで県内十九箇の印刷発行人は東京市牛込加賀町一ノ五、松井紀一郎とあり、松井哲太郎、篤太郎、紀一郎の相互関係は判明しない。

松井紀一郎に印刷を依頼した千葉県内の各町村の鳥瞰図は、千葉市寒川新宿一三〇九、大日本市街鳥瞰図発行所千葉支局、小川正が発行篤志家募集に当たり、発行の資金にしていたようだが、昭和五

七九歳の哲太郎には電車の非常警笛が聞えなかった。最近この証言を伝えた人は、当日が紀元節だったということで記憶に残っていたという。

※(一) 大正・昭和戦前期の松井天山作鳥瞰図について(佐藤達一郎) 月間古地図研究 一五三号

※(二) 右同 ※(三) 右同

### 絵図と地図

寛永十一年（一六三四）、徳川家三代將軍家光は、生涯において三度目の上洛をする。従う者総数三十万七千余人に上り、その未曾有の人数は將軍家の威光、実力を誇示するものであり、京都では上下危ぐの声があったという。幕府はこの上洛のため、充分の準備をしたが、宮城和甫、秋山正重の東海道地図作成もその一つであろう。

さらに、正保三年（一六四六）、街道整備の政策を積極的に進めるため、松田定平、飯河直信に江戸から大坂に至る道路、宿駅など巡察、地図作成を命ずる。この結果が『木曾路、中山道、東海道絵図』（寛文八年（一六八八）国立国会図書館蔵）と見られている。

この時代の商品経済の隆盛に伴う海陸の交通の発達により、各階層の人々は、幕藩体制の制約をこえて名所遊覧や新知識を求めて旅立つ。道中図の出版は正に求められていたのである。これらの多くは、街道の里程が目的の交通図であり、沿道の風景を絵巻風に仕立てて写実的であったが地図とは程遠い。

絵図という名称は、海野一隆氏によると文禄四年（一五九五）『天草版羅葡和辞典』（イエズス会編）にゲオグラフィア——地理を「諸國の絵図」、ピクトウラ——絵画を「絵」と訳出しているといわれ、絵

年発行の『千葉県検見川町鳥瞰図』のように地元有志、検見川青年団支部長に広告募集を委託したケースもある。

昭和六年（一九三二）の『千葉県松戸町及明村鳥瞰図』から、松井哲太郎自ら発行人となり、船橋町九日市七二に居を移すが、翌年、葛飾町西海神九一七に、さらに翌八年、松戸町三ノ一四二五に移転する。以後昭和十五年『金龍山浅草寺境内図』まで発行地となっている。この年印刷も松戸町三丁目松戸印刷所に変わり、昭和十二年までの作品を印刷している。また昭和八年（一九三三）の『千葉県八日市場鳥瞰図』の募集人は千葉市東院内一〇三七の関谷平一郎であり、大日本市街鳥瞰図発行所千葉支局とは関係が途絶している。

鳥瞰図絵師松井天山畢生の大作、『成田山新勝寺鳥瞰図』、『金龍山浅草寺境内図』はカラーの石版印刷（初期のオフセット印刷）であり刷り枚数も従来とは比較にならないほど多いようである。一括納入された気配があるのもいづれも大寺院がスポンサーとなって印刷されたからであろう。この印刷は二枚とも、東京市下谷西町精華社である。

昭和十五年九月に描かれた『金龍山浅草寺境内図』を最後に、天山鳥瞰図は一枚も発見されていない。この図が発行された翌年に太平洋戦争が始まり、個人で出版する鳥瞰図を含む地図類は発行不能となってしまう。この時すでに七十二歳を過ぎた松井哲太郎は、吉田初太郎のように軍部と結託して、外地に出張し鳥瞰図を描く気力はとうてい無かったのであろう。

戦後間もない昭和二十一年、哲太郎は市川市八幡四ノ五の古い友人U氏宅に寄寓した。翌年二月十一日、その終焉は悲痛な事故死だった。仮寓宅から外出し、近くの京成電鉄踏切をおぼつかなく歩行中、図は中世以後公私一般的には地図の意味で使われていた。それは、図の目的が地籍図ではなく、一般図としての性格をもった地勢、水系、集落、耕地、道路などを描き、自領と他領の境界に神経を配った田図があり、より方格図である白図と区別して「絵図」といったのが元であった。

絵巻式だが近代的地図の約束事——縮尺、方位、距離、位置など土地の様子をできるだけ正確に表現した東海道の地図が現れるのは慶安四年（一六五二）のことである。この実測図は現存しないが、測量は北條氏長、福島国隆が担当した。その一人、北條氏長は、江戸時代初め軍学者として知られ、下総に陣屋のあった井上筑後守の後を受けて、宗門改役となる。『契利斯督記』の著作があり、オランダ人、シエーデルから砲術を学ぶが、その弾道学の基礎は距離測定であり、測量学を金沢刑部から受け、明暦大火後の江戸測量をしている。実測の結果は、『東海道分間絵図』、縦二六・七センチ 横全長三六メートルの図巻を五冊の折本として元禄三年（一六九〇）板木屋七郎兵衛から上梓される。

分間図として江戸図の基本となった『新板江戸大絵図』（寛文十年（一七三〇））と同じく作者は遠近道印、図工は菱川吉兵衛。題名の通り街道部分は一町（約一〇九メートル）を三分（約九ミリ）にした縮尺一万二千分の道中図である。遠近道印、曰くありげな偽名である。——あちこち歩き回り道の印を記す——地図師の意味か？、諸説あるが前記北條氏長の弟子、藤井半知という説が有力である。

版木屋七兵衛は、実測図の出版にあたり版下絵を房州保田の縫箔師、菱川吉兵衛に依頼する。吉兵衛は浮世絵画の祖といわれる師宣その人であり、以来道印とは密接なコンビを組む。師宣は、道中図



として印行するならば、実測図では堅苦しいと、絵面化を提案。一里塚、高札場などの目印を描き込み、その絵画的表現によって絵図は大衆化し、江戸時代を通して絵図の版行は浮世絵師に帰した。

- ※(一) 徳川家光公伝 日光東照宮社務所 昭和三十六年
- ※(二) 日本古地図大成(海野一隆) 講談社 昭和四十七年
- ※(三) 古絵図考(小野忠重) 十三頁 岩崎美術社

### 鳥瞰図

絵地図と鳥瞰図とは本質的に異なる。絵地図は、地表における事物の位置を記号によらず絵で表示し、しかも絵画的な遠近法を使用しないで遠い所、近い所を同一範囲内において同割合で縮写する。

一方、近代鳥瞰図の原点は、レオナルド・ダ・ヴィンチの「トスカナ鳥瞰図」とされる<sup>※(一)</sup>。十八世紀まで都市風景と戦場の場面が鳥瞰図の主役であったが、十九世紀になると観光産業の発達から、自然景観を対象とする鳥瞰図が多く描かれるようになる。

今世紀最大の鳥瞰図画家としてハイリッヒ・チエザール・ペランがあげられるだろう。ペランは、各種基本図の徹底的利用に加え、小型飛行機によって目的地の地形、地表の印象をカラーフィルムに撮影、描写に当っては自動エア・ブラシ、パノラマ図化機を利用するなど現代のテクノロジーを導入して、陽光あふれる絵画的な澄みきった眺望空間を創造したのである。主な作品は、オリンピック公式図(第10回冬季オリンピック・サラエヴォ大会)や、ヒマラヤ、アルプスの大鳥瞰図がある<sup>※(二)</sup>。

このような西洋鳥瞰図の基本は、伝統的遠近法による単視点の斜景図に発しているが、一方の日本において古くから見られる大和絵

※(四) ちずのしわ(うんのかずたか)一〇二頁 雄松堂出版 昭和六〇年

### 江戸の鳥瞰図師二人

日本において真の意味での鳥瞰図——単視点斜景図を描いた絵師は歟形憲斎(北尾政美)である<sup>※(一)</sup>。

『武江年表』の著作者斎藤月岑は、嘉永年間(一八四八—五三)に神田明神額堂に掲げられた憲斎筆の『江戸名所一覽図』を真見し、後に『武江扁額縮図』と題し、この扁額模写図と序文を付して一本とし<sup>※(二)</sup>、その序文に——文化中憲斎歟形紹真始て江戸一覽図をあらわし梓に上せて公布し、続て銅版の再図(割注、横六寸計有)を鑄せしめたり、其後文政の始神田社額堂建立の頃、左の図を描て揚る所にして——と、『江戸名所絵』を出した享和三年(一八〇三)来、鳥瞰図にこだわりつづけたこと、そして同構図の垂欧堂田善の『東都名所全図』は、これが原図だったことが知れた。寛政十年(一七九八)刊『東海道名所図会』には絵師に竹原春泉の外、憲斎北尾政美も加えられている。この一事は鳥瞰図的なりアリティが求め始められたからであろう。

やがて幕末、もう一人の浮世絵師、橋本貞秀によって絵図は近代化される。

安政六年(一八五九)六月、ミナト横浜がこつ然と出現した<sup>※(三)</sup>。イギリス初代行使オールコックは「魔法使いの杖の一振りによって葦の生えた一寒村が一瞬にして国際港と化してしまった」と記すほどである。やがて黒船が触る相ふくむようにして入港、港内は物見高い見物人の小舟でにぎわう。

そんな中に舷側真際に近寄って写生する初老の絵師がいた。絵師

風の絵巻や源氏物語絵巻、名所図絵には俯瞰図描法が多用されてきた。これらそれぞれについては先学の多くの論考がある。単的にごく手近な山や丘に登り、「高い山から谷底見れば」といった眺望可能な日本の地形的条件が俯瞰図発達に大きな影響を与えたのではと思われ<sup>※(四)</sup>。

絵と地図の中間的な、このような俯瞰図の多くは、いわゆる古絵図として絵画のジャンルに扱われた。しかしこの中には社寺などの人文的情報を日本人の感性によって伝達しようとした本来地図の概念に属するものが多い<sup>※(五)</sup>。これらの図を海野一隆氏(月刊古地図研究)八巻九号・江戸鳥瞰図の創始者の様式分類によつて見ると、(一)複視点斜景図、(二)平面斜景混合図、に分けられるという。

日本の伝統的俯瞰図のほとんどは(一)の様式であり、視座が定まらず建物の上や左上の斜景として描き、ときには盆地の山を中心から視点を三六〇度回転、パノラマ風に見る。また道中図では視座は平行移動するが、いずれも透視法の原理がなく、曼荼羅図や洛中洛外、江戸の屏風のように遠景を上積みあげる。(二)は平面図中に建物、樹木を側面、斜景で示すものであり、それが縮尺に関係なく、善美を盡くしたものであるため、古絵図として扱い易いが、土地表現を平面化していけばそれは地図に外ならない。

- ※(一) ペランの鳥瞰図技法(森田芳夫) 地図情報五〇号(昭和五十八年)九頁
- ※(二) 名所図絵をめぐって(矢守一彦) 日本屏風絵集成巻十 講談社一九八〇
- ※(三) ペランのパノラマ(ペラン著) 福田宏年記 実業之日本社一九八〇

は橋本兼次郎といい、下総国葛飾郡布佐の生まれといわれ、三代豊国に師事して貞秀、後に横浜絵の玉蘭齋として名声を得る。

貞秀は、師豊国の襲名以前の国貞に因んだ貞秀の外、五雲亭、玉蘭の別名を持つ。その作画期は天保から明治に至り、初めは武者絵、歌川派の風景画、芝居絵からき然として鳥瞰図に取り組んだ。

元治二年(一八六五)の『海陸道中画譜』自序では——大よそ名所を描かんにも親しく実地を踏み見ずれば、その真景は写しがなく、おのれ去る年、御代泰平の余沢によりて永福閣東講の群に入り伊勢両宮を拝せしより、久しく浪華に遊びつつ、それより中国九州を経て、肥の長崎まで巡歴しつつ、帰るさは水路を大坂まで来り——と、貞秀は日本全国足跡を残し、何枚続きもの鳥瞰図を描いた。

徳川昭武が出席したパリ万国博の幕府出品浮世絵画帖の筆頭絵師として江戸名所十景を描いたのが現世的には最高の栄誉だった。

貞秀も本書の主人公と同じく詳伝が知られず、残された作品で没年を推測せざるを得ないが、明治八年までは作例がある。貞秀の最後は鳥羽で自殺し、西念寺に葬られたという説もあるが確証はない<sup>※(六)</sup>。

西南戦争があった明治十年(一八七七)松井天山はまだ九才だが、その後貞秀の鳥瞰図、詳細な地形図を真見したことは疑いない。天山の鳥瞰描法は銅、石版による新式の測図がようやく出回り始めてから実現する。

- ※(一) 「江戸鳥瞰図の創始者」補遺(海野一隆)月間古地図研究 一九九号(昭和六十一年)
- ※(二) 古絵図考(小野忠重)、日本古絵図集成 解説二二頁 岩崎美術社



※(三) 神奈川県美術風土記・幕末明治初期篇 七頁 神奈川県立近代美術館 昭和四十五年

※(四) 古絵図考(小野忠重) 日本古絵図集成解説 四〇頁

※(五) 五雲亭貞秀の終末(端山孝)

### 松井天山鳥瞰図二種

〈平面図ヲ美化シタル熱海温泉実写案内図〉

昭和二年(一九二七)印刷発行(神奈川県立図書館所蔵) 発行人は芹沢弘である。

熱海の地名は『熱海温泉記』において仁孝天皇の御世(四八八〜四九八)熱湯が海中に湧出し「あつみか崎」といつていたことが記されている。「東鑑」建保元年(一一二二)のくだりには伊津国阿多美郷と表記、室町時代にいたり現今の様に熱海と記された。

『日本古絵図集成』には師宣の『豆州熱海絵図』が再録されており、松井天山の熱海温泉実写案内図と比較すると興味深い。師宣図には天和元年(一六八一)の割注があり、元禄三年刊行される『東海道分間絵図』の先駆けであり、師宣は遠近道印の精密な実測図を見て上の仕事に外ならないのである。絵画化された杜寺の正、側面を記号化すればそのまま地図であり、本町通り、新宿、温泉寺、来ノ宮神社などが記入され位置関係も正確である。図上の湯出しの岩は『東海道名所図会』にも——潮の満干にしたがい岩のはざまより湯気むし上りて、ことの外熱き湯はしり出る。これをかけひにとりて家々にて諸人入湯す——と記されている、大湯以下熱海七湯が古来知られており、徳川家康も慶長九年(一六〇四)の本陣宿帳に見え、以来徳川家へは御汲湯が陸送の外、押し送り舟で急送されている。

その見返りによってか、江戸時代、大湯の引湯権、営業権は二七軒の湯戸に独占された。

松井天山図にはその七湯の中の河原湯が図示されている。漁村に過ぎなかった熱海は明治二十二年(一八八六)、泉、伊豆山を合わせて熱海村。さらに明治二十四年熱海町となる。湯治場として全国的に知られるのは、明治三十年(一八九七)、読売新聞に連載した尾崎紅葉の一篇の小説『金色夜叉』であり、天山図にはこの小説に由来した貫一茶屋などが見えるのも、商魂たくましい現在と変わりない。左上の梅園では、毎年一月十五日から二月十五日まで熱海梅祭りが開かれる。今は熱海のシンボルになっているが、明治十九年(一八八六)、横浜の豪商、茂木惣兵衛の出資により造園されたものである。

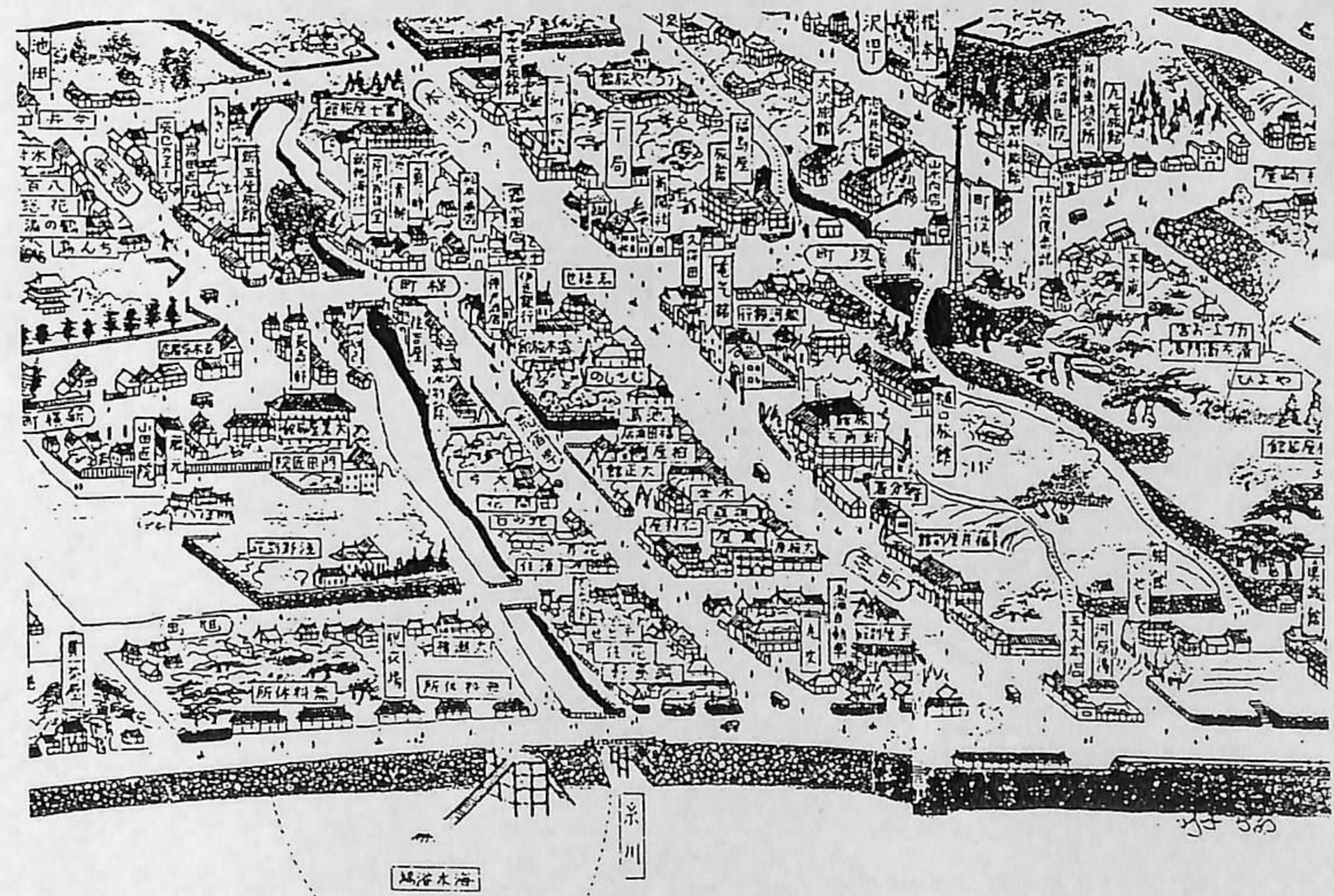
熱海が日本の熱海として繁華を誇るのには、丹那トンネルの竣工(昭和十一年)によって東海道線と直結するまで待たなければならぬ。明治、大正までは小田原から徒歩で一日、かごで半日という交通不便の土地であり、人車鉄道、小型の軽便鉄道が導入された。

丹那トンネルの工事開始は大正七年(一九一八)。天山図ではトンネル東口が描かれているが写生当時は開通しておらず、熱海駅到着の列車はここで折り返した。

熱海温泉実写案内図は、湯治場として戦前最盛期の町並を描いている。昭和二十五年四月十三日夕刻から深夜にかけ、渚町で出火したいわゆる熱海大火は温泉旅館街を焼き尽し焼失家屋九七七棟、この図の熱海は消えてしまう。

図の冠称どおり、松井天山は平面図をベースに江戸時代の絵図の描法を生かし俯瞰図とした。図の中心は藤森稲荷付近、視座は左斜上、視点の移動が見られる。裏面の商工案内は、千葉県内の都市鳥

平面図ヲ美化シタル熱海温泉実写案内図(部分)



瞰図と同様だが、その内容は最上段に緒言として交通、温泉、娯楽機関、名所旧蹟、温泉土産、熱海町歌、中四段が熱海旅館案内と著名営業者案内。最下段は熱海名所(絵葉書の縮写らしい)写真版八葉を付す。本図の発行者芹沢弘は、熱海温泉御用邸前通りで、芹沢百貨堂を経営、新聞、雑誌など湯治客の入用品を取り扱う二百貨店らしく、熱海温泉案内図、熱海名所絵葉書などを発行している。

### 〈金龍山浅草寺境内図〉

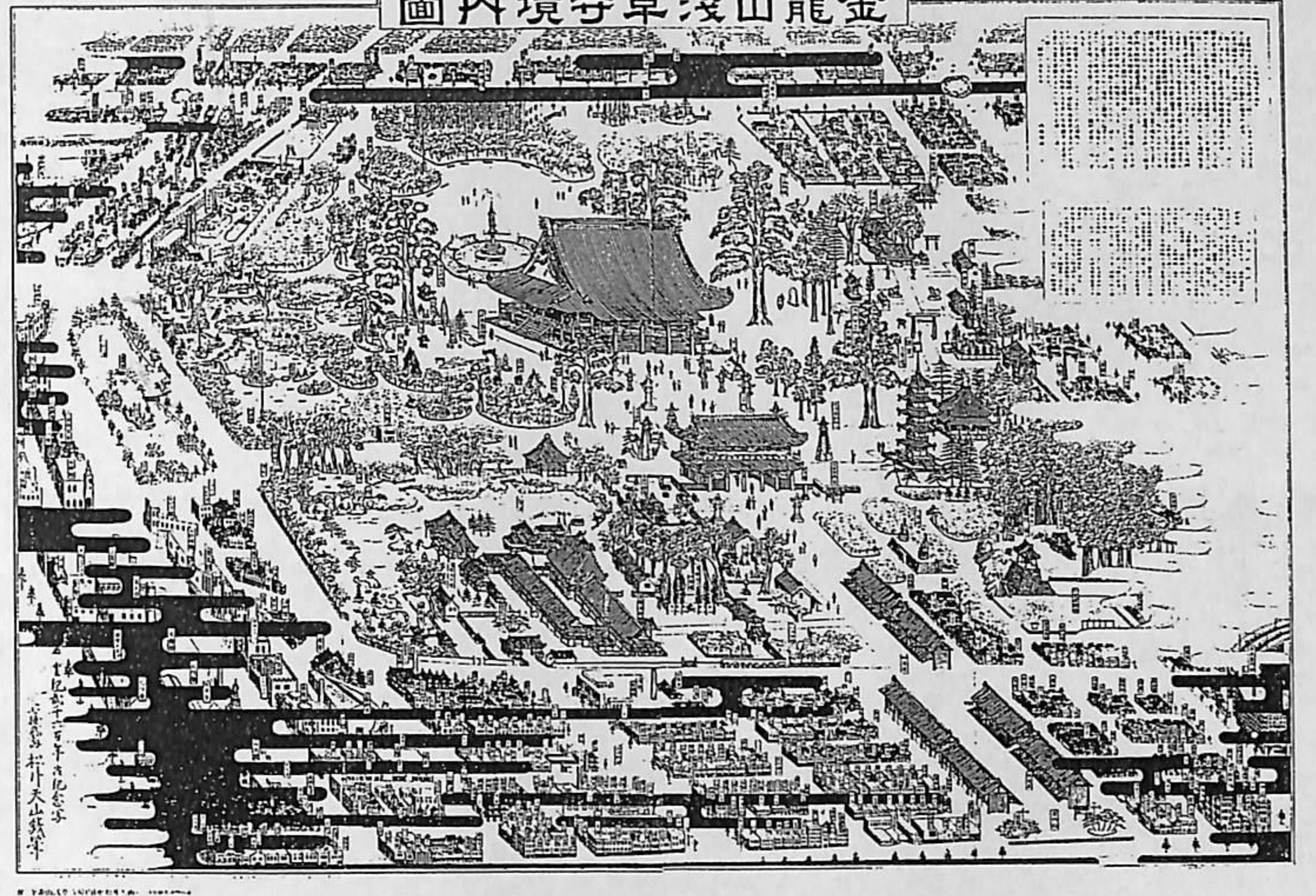
手元の記録では松井哲太郎最後の作品とおぼしい鳥瞰図が本図である。皇紀二千六百年当記念写 七拾式翁 松井天山鉄筆と記されている。縦三六センチ、横五一・五センチ。左余白に浅草公園浅草寺蔵版、下余白に昭和十五年九月三十日発行画作兼発行印刷人千葉県松戸町一四二五番地松井哲太郎と横書し、右上部余白に東部軍司令部許可済の記入がある。なお、浅草文庫(浅草観光連盟)所蔵の本図が昭和六十三年『月間古地図研究』二〇〇号記念出版の付録として複製されている。

浅草寺は、金龍山伝法院と号し、元文五年(一七四〇)以来上野寛永寺の兼帯所であり、戦前までは延暦寺末の天台宗の別格本山であった。浅草寺境内と周辺の鳥瞰図写生後、五年を経て、昭和二十一年、東京下町の大空襲で罹災、全山灰じんに帰し、戦前の浅草の面影を伝える貴重な鳥瞰図である。

図の中心は、関東大震災(大正十二年)でも焼け残った大本堂で、視座は左斜上におく空間描写である。仁王門わきの五重塔も関東大震災の厄をよけ、国宝の標示がある。慶応元年(一八六五)焼失した雷門跡に至る仲見世通りを左斜上から描いているが、この石畳の通



金龍山浅草寺境内図



金龍山浅草寺境内図

りは観音様への表参道であり、江戸のころの盛り場気分が濃い。その区画は柱から柱までを一区といい東側より西側が少ない。いわゆる六区は、浅草寺境内の区画割りをそのまま通称にしたもので、明治末年から日本に登場した活動写真のメッカであった。図によって見ると、日本館(映画)、大東京(演芸)、松竹館(映画)、帝国館(映画)、富士館(映画)、三友館(映画)、万世座(剣劇)、花月劇場(軽演劇)、遊楽館(映画)、大都劇場(映画) 江川劇場前は六区の池であり、六区右側にはオペラ館(レビュー)、千代田館(映画)と続き、六区中心に二十九館もの興業街を形成していた。現在はずかずに日本館、ロキシ、常盤座、東京倶楽部界わいのみが昔の名残りをとどめるのみである。

図右上に金龍山浅草寺由来と浅草神社概説を囲みで掲げるのも境内図独特のものである。囲み下の二天門は現存し、元和四年(一六一八)二代将軍秀忠寄進による切妻木瓦葺、八脚門は当寺最古の建造物である。仁王門下は伝法院。浅草寺の本坊であり、代々貫主が居住して元三会、霜月会など重要儀式がここで行なわれる。

池泉回遊式庭園は、伝法院庭園として知られる名園である。作庭年代は南北朝〜江戸初期、面積約三千五百坪、仲見世、六区のけんそうとは別に静かなたたずまいを残す。寛永以後作庭時の石組が荒廃しながらも保存され、図には安永六年(一七七七)建立の客殿、玄関、書院が見える。

境内図として浅草寺が紀元二千六百年記念に信者に配ったものはとされているが、松井天山は商工案内を兼ねた鳥瞰図を手掛けた習慣からか、本図においても雷門周辺の商店、六区の興業街、ひさご通り、言問通りの各商店名を入れる親切さである。

第二次大戦ぼつ発を翌年に控えて、鳥瞰図作成時の検閲も強化されたであろう。初三郎式鳥瞰図の刊行は日本内地ではめつきり少なくなり、発禁も予想された。国全体が軍国調となり、観光案内どころではなくなったのである。

松井天山鳥瞰図制作年一覧

- 一、日光中禅寺真景図 大正十一年(一九二二) 栃木県日光御幸町堀井新聞店発行
- 二、磐越西線温泉案内 大正十三年(一九二四) 仙台市東三番町百番地 両々堂(一九二四)
- 三、国立公園候補地盤梯山附近地及避暑温泉案内 大正十四年(一九二五) 猪苗代 小林商店
- 四、平面図を美化シタル熱海温泉実写案内図 昭和二年(一九二七) 熱海町 芹沢弘
- 五、千葉市街鳥瞰 昭和二年 東京市牛込加賀町一―五 松井紀一郎
- 六、千葉県船橋町鳥瞰図 昭和二年 以下右同
- 七、千葉県東金町鳥瞰 昭和二年
- 八、千葉県四街道駅鳥瞰 昭和三年(一九二八)
- 九、千葉県市川町鳥瞰 昭和三年
- 十、千葉県本納町鳥瞰 昭和三年
- 十一、千葉県勝浦町鳥瞰 昭和三年
- 十二、千葉県佐倉町鳥瞰 昭和三年
- 十三、千葉県津田沼町鳥瞰 昭和三年
- 十四、千葉県中山町及葛飾村鳥瞰 昭和三年

- 十五、千葉県八街町鳥瞰 昭和三年
- 十六、千葉県柏町鳥瞰 昭和四年
- 十七、千葉県木更津町鳥瞰 昭和四年
- 十八、千葉県幕張町鳥瞰図 昭和四年
- 十九、千葉県茂原町鳥瞰 昭和四年
- 二十、千葉県検見川町鳥瞰図 昭和五年(一九三〇)
- 二一、千葉県佐原町鳥瞰 昭和五年
- 二二、千葉県大多喜町鳥瞰 昭和五年
- 二三、千葉県松戸町及明村鳥瞰 昭和五年
- 二四、大日本国立公園候補地 鬼怒溪谷温泉郷鳥瞰 昭和六年(一九三一)
- 二五、千葉県浦安町鳥瞰 昭和六年
- 二六、千葉県一宮町鳥瞰 昭和七年(一九三二) 松戸町一―二三 戸印刷所大塚庸
- 二七、千葉県大原町鳥瞰 昭和七年 松戸町三丁目 戸印刷所
- 二八、千葉県八日市場町鳥瞰 昭和八年(一九三三)
- 二九、千葉県多古町鳥瞰図 昭和八年
- 三十、千葉県八幡町鳥瞰 昭和九年(一九三四)
- 三一、千葉県笹川町鳥瞰図 昭和九年
- 三二、群馬県太田町三勝金山高山大光院鳥瞰図 昭和十一年(一九三六)
- 三三、千葉県木更津町鳥瞰 昭和十一年
- 三四、千葉県松戸町鳥瞰図 昭和十二年(一九三七)
- 三五、千葉県成田山新勝寺鳥瞰図 昭和十三年(一九三八) 精華社
- 三六、金龍山浅草寺境内図 昭和十五年(一九四〇)



## 鳥瞰図に見る八幡町の概観

本図が描かれた昭和九年（一九二〇）当時の八幡町は明治二十二年三月三十一日に施行された町村合併により、八幡宿、五所、五所金杉、山木の五地区が合併して出来た人口五千人の町である。

本図に描かれている街並は、右五区の内八幡宿の市街全域で、浜本、仲町、観音町、片町、南町の五区である。

昭和九年当時の町筋は江戸時代以来大きな区画整理もなく、町割りには全く変わりなかったが、昭和三十年に八幡町、菊間村、三十一年に市原村の一部が合併して市原町と改まり、昭和三十八年に同町を含む市原郡が全郡一市で市制を敷き市原市となって、市の臨海部の京葉工業地帯の造成と相俟って街衢は整備され、近代都市へと大きく変貌した。八幡地区も臨海部、旧市街共に整備され昔日の面影はない。

八幡町は明治以来市原郡下の行政の中心的役割を果たした土地であるが、後背地は養老川の広大なデルタが広がり、米麦を主とする豊富な農産物の収穫があり、その農産物を主原料とする味噌、醤油の醸造が盛んで、ここで生産された物産は遠く東京方面に五大力船により海上輸送された。海岸に面した浜本町は港湾が整備され、土地の物産以外の物資も集荷され船積みされた。同時に東京からは酒や肥料等が輸送されて来る等、物資の集散地として発展した。

また八幡町の海岸は遠浅で、海苔や魚介類が豊富に採れ漁業は盛んであるが、海水浴場としても知られ、東京方面から来遊する人が多かった。国鉄（現JR）八幡宿駅から海岸まで徒歩四〜五分で海岸

に出られるという事と、**●**が奇麗で且つ安全である点が評判を呼んだようだ。夏休みには八幡町近在の小学生はもちろん、学習院を始め東京都内小学校や中学校や女学校が団体で潮干狩や海水浴に来た。こうした団体客を運ぶ為め国鉄では、夏期には両国駅から臨時列車を増発した程、八幡宿海岸が観光地として内湾では盛も賑わった人気の高い浜であった。八幡町は行政、経済、観光の町として発展したが、大正二年小湊鉄道の敷設計画が具体化し、路線の起点を八幡とする案が出されたところ、八幡町住民の反対により、同線の起点は五井となり、交通の中心が五井町に移った事は、当町にとつて大きなマイナスとなったことはいなめない。

本図は、こうした八幡町の繁栄の様子を写している。駅周辺には九十八銀行八幡支店、銀行倉庫、合同運送店、八幡町役場、小学校、郡農会、八幡警察署、八幡郵便局、土木出張所及び食堂、旅館等があり、物資流通、行政の中心地であることを示している。

町中央から観音町方面には地場産業では最も盛んな醤油、味噌醸造所が集中し、黒煙を吐く煙突が立ち並んでいる。

浜本町の海岸は船舶の出入出来る溜りがあり、港湾として整備され、二〇噸級の五大力船や伝馬船が接岸出来、市原、長生方面からの物産を船積みして東京方面に海上輸送し、東京からも多くの物資が常時輸送され、町は常に物資を運ぶ荷馬車等が往き来し、街頭には煮売り屋と呼ぶ食べ物商等があり大変な賑わいであった。しかし昭和九年頃には自動車等による陸上輸送が普及し、五大力船による海上輸送は衰微の一途を辿り、船主は転廃業を余儀なくされた。

五大力船による東京方面への海上輸送が出来た事により、八幡町には大きな米穀問屋が多く、市原郡内一円から長生方面にかけて手





浜本町海岸の賑わい (昭和初期)

広く取引していた。市原出戸の米穀商は街はずれに「買い場」という仮の店を設けて、荷車で運ばれて来る米、麦等を競って買付けた。八幡町は物資の集散地として大きく発展したが、その原動力となったのは五大力船による海上輸送が出来た事により、穀物問屋や醸造業者が商圏を拡大し、取引が東京方面に及んだ事である。かくして昭和初期の八幡町は、市原郡に於ける中心都市として行政・商業・水産・観光の各方面に大きく発展した。

#### 鳥瞰図に見る町並み

第九十八銀行八幡支店 明治四十四年十一月仲町に開業、大正十一年に八幡宿駅通りに移転新築した。開業当時の建物は木造瓦葺の平屋であったが、駅通りの建物は鉄筋二階建の近代建築である。浜本町には千葉合同銀行、大正無尽申込所がある。金融機関はいづれも仲町と観音町方面に所在する事が、地場産業との係りを示すものである。

土木出張所 元の市原郡役所である。瓦葺木造二階建の建物である。郡役所は大正十五年廃止され、そのあと県土木出張所と県穀物検査所八幡出張所となった。通りに面した方は煉瓦作りの塀が囲繞し、落ち着いた感じを与えていた。

千葉区裁判所八幡出張所 駅通りには役所や代書屋が軒を並べている。当初は平屋の前近代的な建物であり、役所としては余り目立つ存在ではなく、一般民家と大差ない外観の建物である。

その他駅周辺には郡内唯一の二階建の小学校と市原郡水産会事務所があり、県・郡関係の主要な官公署が当町に集っていた。

八幡町内には歴史的に由緒のある神社仏閣が多い。特に飯香岡八

幡宮、円頓寺、無量寺、万徳寺等は著名である。

飯香岡八幡宮 白鳳四年(六五三)創祀で、国府惣社八幡宮であったと伝えられる。子育八幡とも呼ばれ安産子育の神として崇敬されている。旧暦八月十五日の秋の祭には近隣の町村から子供を連れて参詣する人が多く、「柳楯の神事」は著名である。当神社の本殿は国指定重要文化財であり、拜殿は県指定文化財となっている。最近四基の神輿が中世の所産である事が墨書銘によって確認された結果市指定文化財となった。その他貴重な文化財多数が所蔵されている。又神社の森は沖から帰って来る漁船や五大力船にとっては航行上の重要な目標であった。

円頓寺 日蓮宗妙満寺派に属し、本行寺の末寺である。七里法華で知られる日泰上人が隠居寺とした由緒ある寺である。現在同寺に日泰上人が着用した蓮の織維で作られた衣が保存されている。

八幡宮の神主市川刑部の一子円頓の病気を、日泰が祈禱して治したところから寺号を円頓寺としたと伝えられる。

無量寺 浄土宗に属し大蔵寺の末寺である。当寺には千葉康胤の墓がある。康胤は千葉宗家十六代胤直を討つて千葉十七代を継ぐが、康正二年(一四五六)東常縁と戦い、村田川付近で討死した。死骸は観音町の胴埋塚に埋葬されたと伝えられるが、当寺に康胤、胤持など千葉一族の墓とされる五輪塔三基がある。

万徳寺 真言宗に属す。以前、万徳寺付近から細い露路があり、その小路を東に向かうと御墓堂という小墓地に突き当たる。この墓地は天文七年(一五三八)十月初旬北条との戦いに敗れて討死した足利義明の墓がある。墓地周辺の小さな木立は今も変わらず、昔のたたずまいを残している。

私立南総中等学校 明治三十一年三月、川上規矩によって創設された。二階建校舎一棟、道場一棟があった。市原郡北には中等程度の学校がなかったため近在からの入学者が多く、優秀な人材を多く送り出した。卒業者の中に直木賞作家の立野信之が居る。

生生堂 南総中等学校の創立者川上規矩は、自宅の前に生生堂薬局と八幡郵便局を開設し、教育者として多くの郷党を養成し、かつ実業家として町の発展に盡くした。生生堂の店舗は草葺平屋造り、明治の建物である。生生堂と並んで八幡郵便局が建つ。方形棧瓦葺木造二階建、生生堂とは対照的な新しい建物である。

市川醤油醸造所 明治頃より酒類卸並びに醤油醸造業を営み、三の銘柄で地元は勿論東京方面に出荷した。工場は平屋棧瓦葺、店舗切妻瓦葺二階建、明治末期の建築で現在も当時の面影を残している。同家は代々政界に重きをなし、中央、地方の政治家の出入が多かった。現在の店舗は当時の面影を残し貴重である。

小川醤油醸造所 棧瓦葺平屋の工場。「ヂガミ小印醤油」「ヒキ小印味噌」の銘柄で郡内及び東京方面に出荷した。このほか醤油醸造所は宇田川、田山、鈴木本家、鈴木新宅があり、醤油、味噌の醸造を行っていた。

村市呉服店 本図には店名が落ちているが、本町にあり八幡町で最も繁盛した呉服店である。資産家で地元で飢饉があった年には自宅の蔵を開き食料等を放出し、困窮者を救済した事が度々あったという。郷党の教育に尽力した川上氏と共に村市氏の徳望は篤く信用をあつめた商店であった。

魚 虎 明治以来の魚屋である。飯香岡八幡宮へ通ずる道路の角にあり、商店街のほぼ中央部にあり、大いに繁盛した。木造二



階建て裏に永室がある。表通りに面した方が店舗であるが、二階は宴会場となる大広間がある。直木賞作家立野信之の自伝小説『流れ』に出てくる堀田高志の初恋の相手青山静子は、当店の娘ふじ(青木ふじ)をモデルとしている。ふじとは彼が南総学校在学中に交際した初恋の女性で、飯香岡八幡宮の森で逢う瀬を楽しんだというが、ふじは日本橋の料亭に嫁ぎ二人の恋は実らなかった。

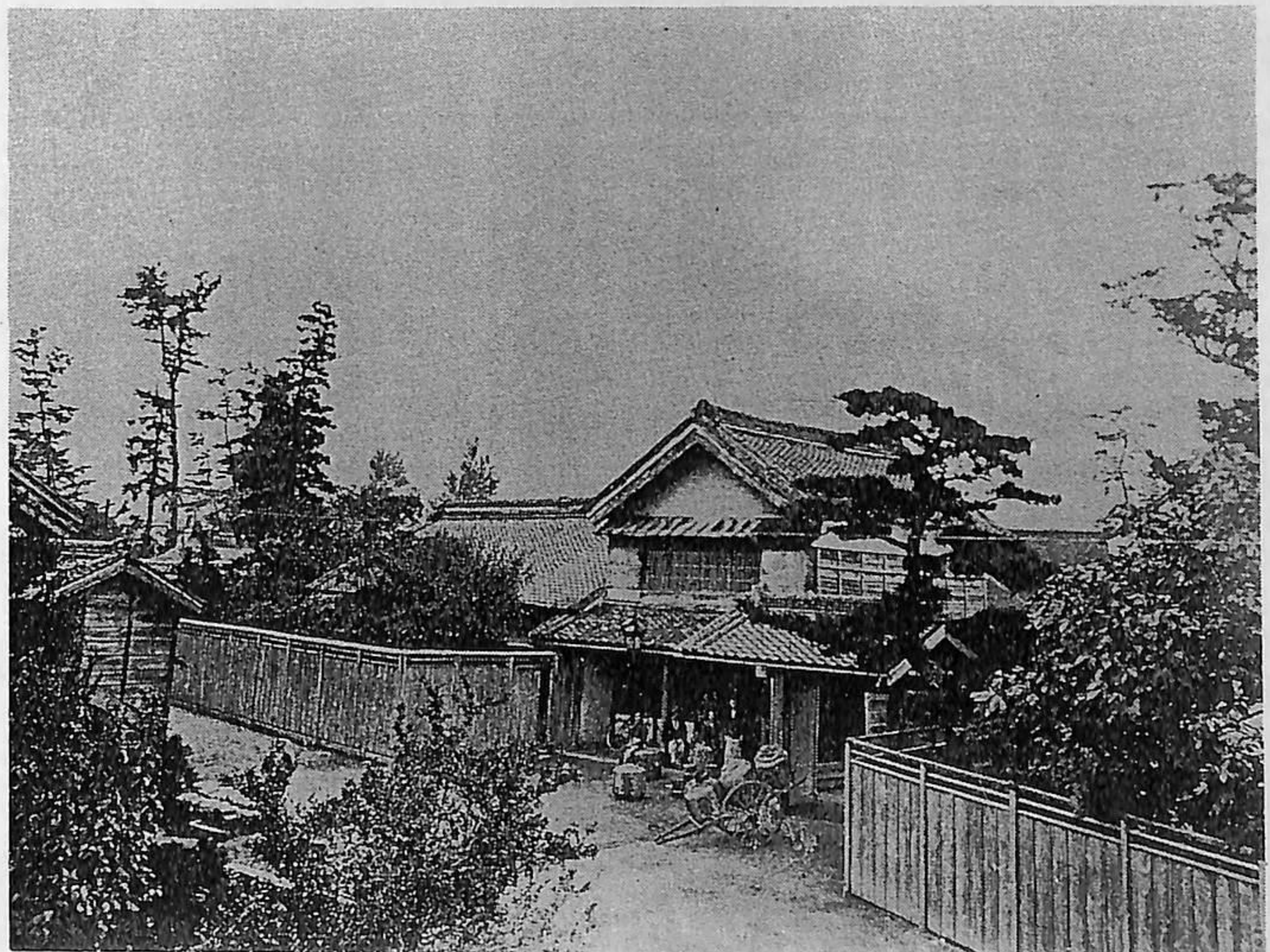
**魚惣本店** 木造瓦葺二階建、八幡で最も有名な料亭で、魚惣の天婦羅で名が通っていた。東京、千葉方面にも多くの馴染み客がいた。石井柏亭も客の一人で、二階から海岸風景を描いている。海水浴場には納涼台があり海水浴客や簀立、潮干狩の人達で賑わった。隣のカフェー・フジミも魚惣の経営する店で、この一角は波止場的な色彩の濃い場所であり、洋風のカフェーも評判良く繁盛した。

以上の外、八幡町に於ける主な旅館は、東屋、曾葉金である。このうち東屋は別荘、支店を有し最も大きく百名位は収容出来、皇族も来遊の折宿泊した。支店は遊客の休憩所であったが、そこは八幡クラブと称し青木定吉氏が演芸場として経営、多くの芸人が来演した。昭和三十年頃閉館したが、終戦直後浅香光代が長く滞在し多くのファンが居た。

白鳥旅館も魚惣に次ぐ伝統のある宿で、同館経営の海の家には毎夏学習院や東京の学校が利用する等広く知られた旅館である。

市原出戸には小倉、今井、青木等の大きな米穀問屋が軒を並べている。東京方面に販路を有し、集荷範囲は遠く長生方面に及び、物資集散地としての町の発展に、五大力船と共に大きく寄与した。堀口石材店は安藤石材店と共に堅実な経営で知られ、富永商店は

昭和初期の市川醸造所



味噌、醤油用樽の製造業として地場産業の一翼を担った。

〈本図裏面広告一覽〉

千葉県八幡町梗概 (原文転載)

省線八幡宿駅は両国駅より二十九里二分(一時間三十四分)、千葉駅より三つ目にして内湾に臨み、遠浅にして水清く実に安全第一なる海水浴場也。又広大なるグラウンドと男女別のプールを設け、物価低廉人情敦厚にして理想の避暑遊寒地たり、又駅前より本町通りへは商家軒を並へ頗る殷富を極む。

当町には県社飯香岡八幡神社あり。無量寺境内には千葉康胤の墓あり。物産は乾海苔醬油等を主とす。

飯香岡八幡宮御神徳略記

飯香岡八幡宮は、人皇四十六代孝謙天皇の御宇天平宝字三年六月、勅命を以て敵国降伏本朝鎮護の爲め上総国放生の地に長くも普田別尊の神霊を斎ひまつらせ国府八幡宮と称へまつれり。

かくもめでたくまします上に、此国の惣社をも兼ねまた国内の諸神をも合せ祀りければ、朝廷に於ても当八幡大神を他にまさりて深く御崇敬あらせられ、国守親王を以て厳かにみまつりを行せられし世にたぐいなき事にていはまくも史に徴して明かにぞありける。

赫々たる御神霊は文武三宸を守護り賜ひければ、我々国民誰か恩徳を蒙らざるものあらむ。かくも大稜威の明顯なるより源頼光、源頼義、源義家、源頼朝、千葉常胤、足利義満、足利義政、足利義明、徳川家康の諸公に於けるも信仰

浅からず思召され、事ある毎に祈誓をかけ御神徳を蒙りたりき(こは御冥助報賽として奉まれば御宝物の多きを見ても明かなり)。

又農工商に至りては朝な夕なを御社に詣て、天恵を蒙りて産業の日に月に繁栄に越くと共に、子孫の長久なるもの昔も今もかわる事なくますます多きを加ふるは、信者みづからも亦よく知らるる処なり。されと世の人のいまだ大稜威のほどを知り侍らぬものもあらむかとおもはるれば、綾に長き事にしあれと謹み敬ひて其のあらましを写し奉るになむ。

○こは往古天平宝字三年六月此国に此神社を創て建てさせられし時、季満卿勅使に渡らせ給ひ自から銀杏樹を植へて詠し給ひし歌なり。

君が為けふ植そへし銀杏樹に  
いくよへぬとも神やどるらむ

○往古より釘付の松と称し境内の南端にあり、周囲十五尺有余の古松にして右銀杏樹と共に世に知らる。従一位勲一等建通公御歌に、

御影山神のめてにし飯香岡  
むかしをかけて世にほひけり

此外あまたの碑あれと省ふく。

○明治四十二年九月二十七日陸軍省より本社へ御献納の戦利品左の如し。

- 二十口径七冊加農砲一門 魚形水雷一筒
- 二十口径七冊加農砲履歴
- 同火砲は三十七・八年戦役に、旅順要塞背面砲台に備へ付けられ、専ら松樹山椅子山堡壘の側防をなし水師營方面よりする我第一師団へ多大の損害を与へしものにして、明治三十八年一

月二日同要塞開城と同時に我占領軍の鹵獲する処となる。此砲は該要塞備砲中同砲六門ありしものの一なり。

祈年祭 二月二十日 本宮大祭 旧八月十五日  
新嘗祭 十一月二十六日  
国府惣社飯香岡八幡宮社務所

千葉県八幡町商工庶家案内

- 石井彌吉 乾海苔類製造 報知新聞専売所
- 精光堂時計点・アサヒ食堂 西支那料理
- 味芳亭 和洋支那料理 織田自転車店
- 白鳥 割烹旅館 カフェー白鳥
- 第九十八銀行八幡支店 魚惣本店 料理
- 青木義次郎 米穀肥料 宮原勝次 精米所
- 岩田万右衛門 雑穀肥料 山下書店
- モナミ食堂 和洋料理 植草商店 米穀新炭
- 好天堂本店 書籍文具 君塚食堂 和洋支料理
- 小林歯科医院 浅野歯科医院
- 寺嶋医院 渡辺医院
- 倉本病院 八木香墨堂 表具師
- 千葉合同銀行八幡出張所 今井呉服店
- 小川商店 醤油味噌製造業 丸山写真館
- 佐倉商店 米穀肥料油類 宮吉自転車店
- 杉山伝三 米菓製造所 宇野沢酒店
- 魚虎商店 鮮魚水問屋 岡田呉服店
- 吉岡商店 佃煮製造 白鳥孝治 材木商
- 鈴木常太郎 精米新炭 藤田屋履物店
- 川上精米所 麴製造 市川醤油醸造所
- 中店市川吉次郎 荒物乾物漆器
- 陣屋鈴木敬介商店 醤油味噌醸造



昭和九年十一月写生  
定価金十銭

昭和九年十二月二十五日印刷

同年同月二十八日発行

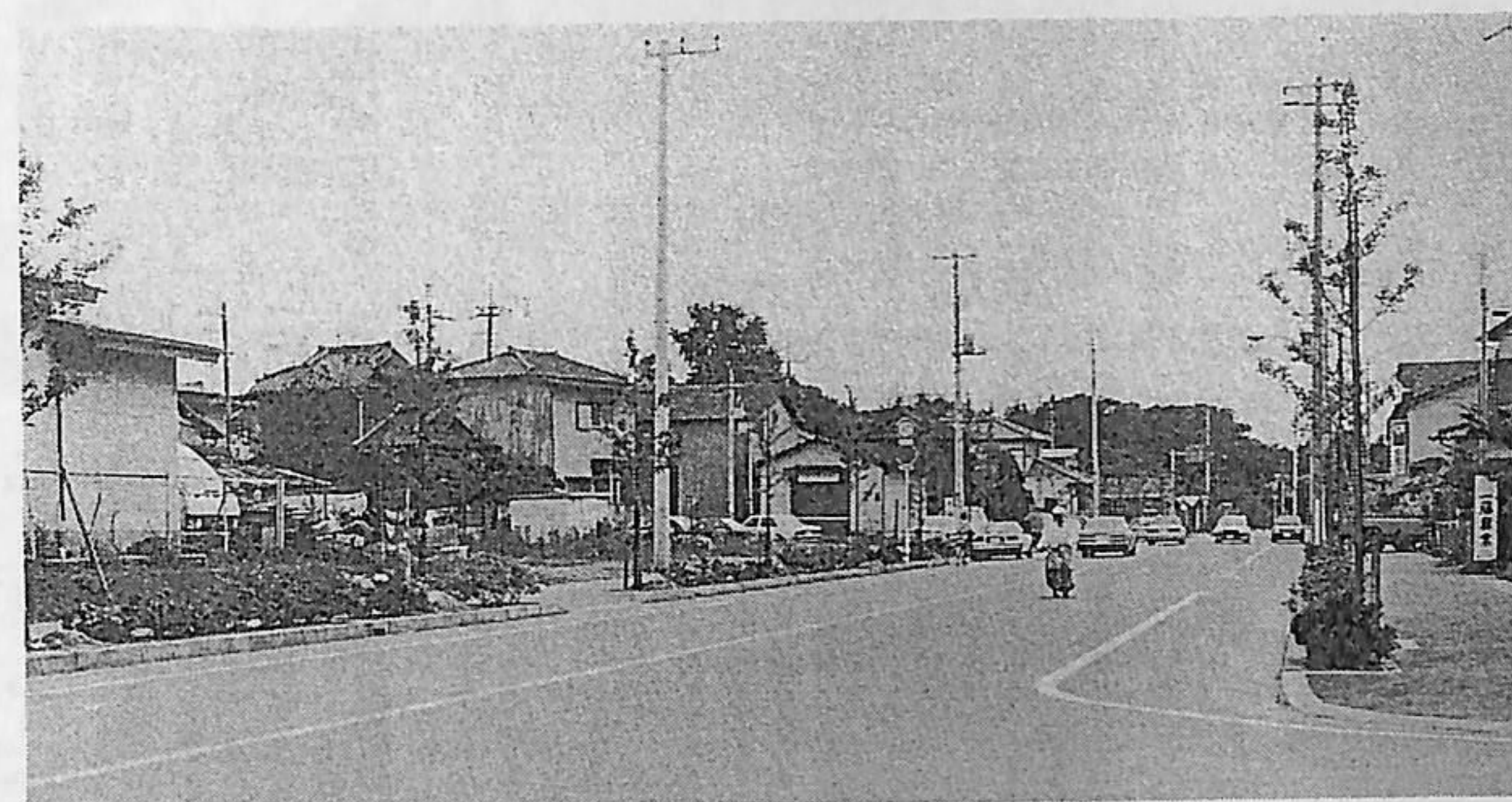
著作兼発行印刷人千葉県松戸町三丁目一四二五番地松井哲太郎

本図を原図所蔵者（成田山仏教図書館）の許可なく複製・転載すること堅くお断りします。

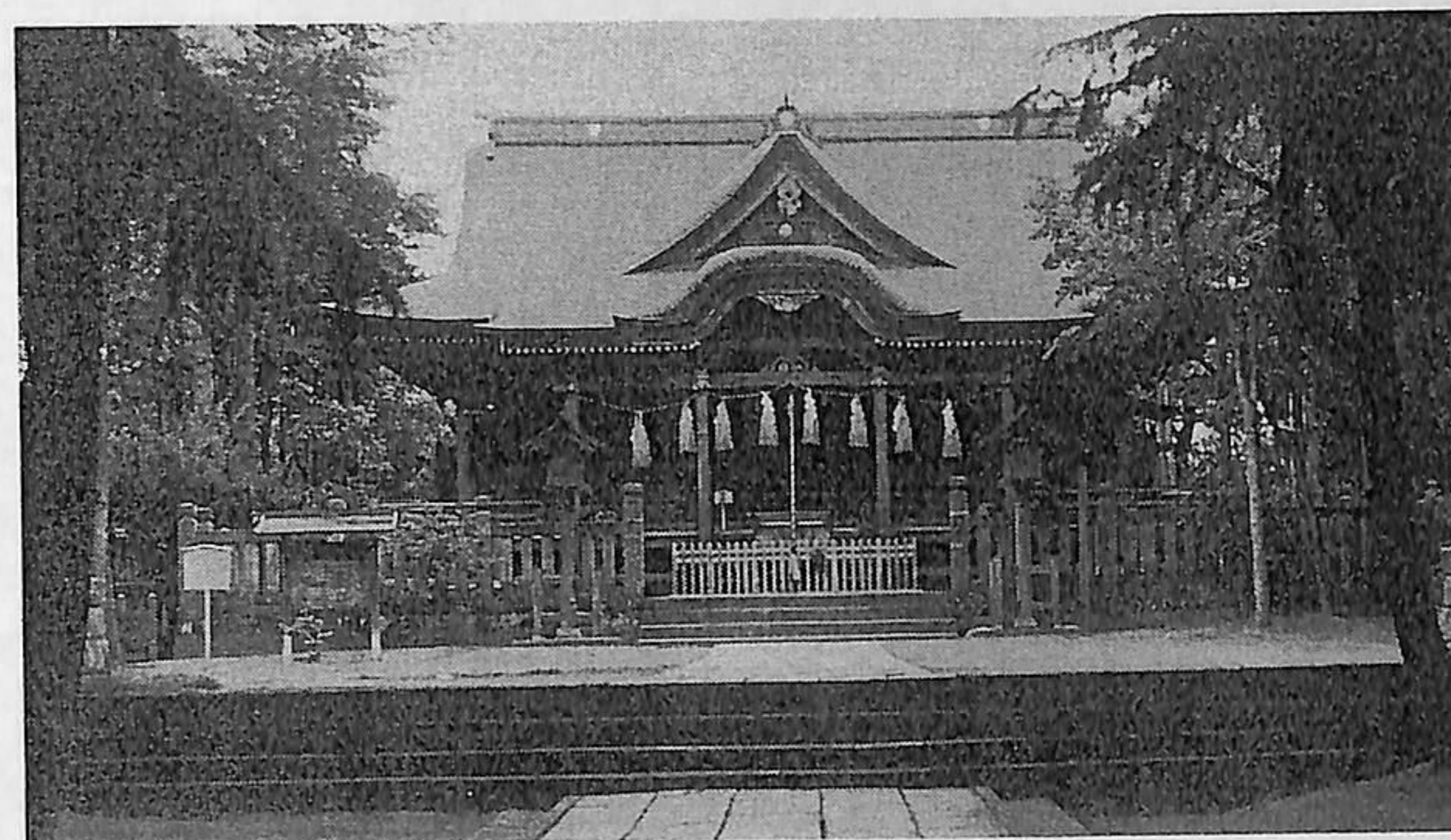
飯香岡八幡宮



八幡地区中心街（平成元年撮影）



浜本町の景観（平成元年撮影）





本年（一九八九）は、一月七日の昭和天皇崩御により平成と元号が改まり、昭和の時代は終った。

昭和は、まさに激動の時代であった。満州事変から第二次世界大戦へ、そして敗戦。焦土と化した町々、打ちひしがれた貧困からの復興、現在に見る世界に例を見ない発展。この時代のなかで千葉県の町々は翻弄され、また発展し、多くのものを失い。新しいものを得てきた。

此度、小社で刊行した『松井天山千葉県市街鳥瞰図』は、昭和二年より十三年までに写された千葉県の一市二十五町（現十五市六町）、二十六枚の鳥瞰図である。この鳥瞰図は、つかの間の安らぎの時代から軍国時代へと移り変わる時期の町々の姿を写し出している。それらは、以後の混乱と発展によって失った明治・大正時代の面影を残した昭和初期の、かつての町の姿であり、現在見ることの出来ない貴重な姿である。特に町々の官衙を始め学校・施設・寺社のほかに、商工諸家が詳細に描かれている。

こうした意味において、この鳥瞰図は各市や町の近代史の、また、近代商工業史の貴重な資料である。しかし、現在ではほとんど入手困難な稀覯文献となり、久しく復刊が熱望されていたものである。そこでこの貴重な鳥瞰図を原寸で複製し、描かれた各町々の推移等の解説を付して刊行した。

この『松井天山千葉県市街鳥瞰図』の刊行にあたり、成田山仏教図書館のご好意により、同館収蔵の二十四枚の鳥瞰図を使用させて戴いた。また『柏町鳥瞰』は、柏市在住の小溝勝氏所蔵のもので、

柏市役所が昭和五十四年に製作した図を、小溝勝氏と柏市役所のご承諾のもとに使用させて頂いて戴いた。成田山仏教図書館、小溝勝氏、柏市役所に深く感謝する次第であります。本書刊行にあたって、成田山仏教図書館高野貞亮氏、成田山霊光館小倉博氏、千葉県立図書館森田保氏を始め、各町の解説を執筆戴いた諸氏、その他多くの方々にご尽力戴きました事を、重ねて御礼申し上げる次第であります。なお、本書発行の際、残念ながら昭和五年製作の『浦安鳥瞰図』の原図をついに入手する事が出来ず、解説書に収録するにとどまりました。今後原図を入手出来れば、何らかの形で発表する所存でありますので、ご容赦戴きたい。

最後に、松井天山（哲太郎）氏について触れなければならない。松井天山氏は「松井天山・鳥瞰図を読む」に前述した通り、数多く残された鳥瞰図でしか消息をつかめず、本書刊行にあたり、最後の作品『金龍山浅草寺境内図』の住所地である松戸市を中心に、また、多くの人々に聞き込みをしたが、氏と関係を持たれた方々はすでに亡くなられ、人柄、事跡またご遺族の有無等不明のままであった。本年三月、市立市川歴史博物館の吉田優氏のご尽力により、昭和二十二年に市川市八幡の篤志家の家に寄寓、同二十二年二月十一日不慮の事故で亡くなり、その地で火葬され、遺骨は親族に渡された事が判明したが、それ以上の事はわからなかった。松井天山氏を知る方、また、ご遺族の消息を知る方からご一報を待つのみである。



平成元年十一月十二日発行

松井天山  
千葉県市街鳥瞰図・解説

発行人 種田哲三  
印刷所 東洋企画(株)  
製本所 (株)河上製本

発行所 聚海書林  
東京都台東区台東一ノ三ノ二  
丸万ビル六〇三号  
電話 〇三(八三五)二〇九一  
振替 東京八一四九六八四

ISBN4-915521-46-X C3021